様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　４ 月　６ 日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２８８９

研究課題名（和文）中・高等学校での英語授業における英語によるアクティブラーニングに関する研究

研究課題名（英文）A study of active learning in English classes at the secondary level

研究代表者
宮迫　靖静（Miyasako, Nobuyoshi）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：６０７１３５２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，中・高等学校の英語授業におけるアクティブラーニング（AL）の普及を目指すものである。大学生を対象として，ALによる内容重視型授業及び協同授業に基づくALを実施し，ALに対する認識及び英語学習に関わる動機づけ等を調査した。その結果，ALは学習者の認識が肯定的で，英語学習に関する動機づけにも好影響を及ぼすことが示された。この知見に基づき，中・高等学校の英語授業におけるALに関する示唆が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　アクティブラーニング（AL）によって21世紀型スキルの育成の育成が必要とされている現在，中・高等学校の英語授業におけるALの普及を進め，21世紀型スキルを有する学習者の育成に寄与する点が，この研究の社会的意義である。
　これまでの英語授業におけるALに関する研究は，内容の紹介や実践の紹介にとどまることが多かったが，この研究では大学生を対象としてALを実践し，検証した点が，この研究の学術的意義である。この実践・検証に基づく示唆は，中・高等学校の英語授業におけるALの研究に寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：　This study aimed at promoting active learning (AL) in English classes at the secondary level. University English-relevant courses were taught in Content-based instruction using AL and in AL based on cooperative learning. Consequently, AL, affecting the students' English learning motivation, was perceived positively. Based on the findings, implications for AL in English classes at the secondary level were given.

研究分野：英語教育

キーワード：アクティブラーニング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

我が国におけるアクティブラーニング(AL)研究の歴史は浅く，AL の内容紹介や指導例に関する研究は少なくないが，その学習効果に関する実証研究は多くない。北米においては，中・高等教育共に AL に関して相当数の研究があり，高等教育における AL の効果に関しては，フリーマン等（Freeman, et al., 2014）によるメタ分析（n = 225）が示した，伝統的講義中心授業に対する AL 型授業における学習効果の優位性が決定的であった。

また，宮迫（2016）の専門知識・卓越したパフォーマンス関するに研究では，計画的練習（deliberate practice）が成功の鍵であり，この計画的練習の原理を反映する３つの F（Focus, Feedback, Fix＝集中，フィードバック，訂正）を授業に活かしたものが AL であり（Ericsson & Pool, 2016），これが AL の新たな理論的支柱になりうることを示した。

一方，英語による英語授業は，大学においてはスーパーグローバル大学等の一部以外には広がりを見せず，高等学校の英語授業も英語使用は 4 割以下という実態（山森，2013）は改善されておらず，中学校でも似た状況があるとされていた。

中・高等学校において AL の普及が図られるにあたって，英語授業では英語による AL の実施が期待されており，AL が受け入れられるには，理論基盤に基づいた実証的データ及び現場の実態に基づいた提案が求められていた。

２．研究の目的

中・高等学校の英語授業における AL の普及を目指して，AL 及び関連のある協同学習に関して，次の点を明らかにすることを目的とした。

(1)　中・高等学校の英語授業における AL に協同学習はどう係るか（研究 1）。

(2)　中・高等学校英語教師の協同授業への認識はどうか（研究 2）。

(3)　大学生を対象とする AL による内容重視型授業（CBI）は効果があるか（研究 3，4，5）。

(4)　中・高等学校における AL による英語授業はどのようにすべきか。

３．研究の方法

研究 1～5 の方法は，各々次のとおりであった。

(1) Miyasako（2018a）では，中・高等学校の英語授業における AL で先駆的な例として英語教員に支持されている，西川等(2016, 2017)と山本(2015, 2016)を対象とした。授業活動を協同授業の５要素（Johnson et al.,2009）である（a）互恵的な相互依存関係，(b) 対面的なやりとり，(c) 個人としての責任 ，(d) 協同学習スキル，(e) チームの振り返り，に分類し，AL における協同授業の関与を分析した。

(2) 宮迫（2021）では，岡山県，山口県，福岡県の高等学校英語科教員 88 名を対象とした。協同的な活動及び協同学習に対する認識を質問紙法（30 項目，6 段階リカート法；長濱他，2009，清水・今村，2017）により，協同効用，個人志向，互恵懸念，協同学習のメリット・デメリットに関して測定し，相関分析及び分散分析を行った。

(3) Miyasako（2018b)では，教養課程英語授業の78名の大学1年生を対象とした。米国のTVニュースを題材とするCBIを実施し，ニュース発表プロジェクトをALの一形態である問題解決・協働学習として取り入れ，学習者のリスニング力及び動機付けに関する認識を質問紙法（40項目，6段階リカート

法；田中，2009，田中，廣森，2007）により測定し，クラスター分析及び分散分析等を行った。
（4）Miyasako（2019)では，大学生129名を対象とし，英語科教育科目のCBIにおいて，ALと講義による伝統的な授業の効果及び学生の動機付けに関する認識を比較した。内容理解と動機付けに関する認識（質問紙法，67項目，6段階リカート法；Miyasako，2017，Taguchi，et al.，2009）等について，平均の分析をした。
（5）Miyasako（2020)では，大学生80名を対象とし，英語科教育科目のCBIにおいて，講義を含むサンドイッチ型とグループ型の2種類の協同授業に基づくALを実施し，動機付け及び協同授業に関する認識を質問紙法（60項目，6段階リカート法；長濱等,2009，田中，2009，田中，廣森，2007）により調査し，分散分析による比較を行った。

４．研究成果

研究 1～5 の成果及び中・高等学校の英語授業における AL に関する示唆 (6) は，次のとおりである。
（1）Miyasako（2018a）では，中・高等学校の英語授業における AL で先駆的な授業実践においては，協同授業の５要素のうち，(a) 互恵的な相互依存関係，(b) 対面的なやりとり，(d) 協同学習スキル，の 3 要素はみられるが，(c) 個人としての責任 と（e）チームの振り返り，の 2 要素はあまり見られないことが示された。比較的大きいクラス規模での AL を運営するための日本型 AL による英語授業と考えられるが，協同授業に必須である（c）個人としての責任，をうまく取り入れることが今後の課題であろう。
（2）宮迫（2021）では，高等学校英語科教員の認識においては，(a) 協同的な活動及び協同学習に関わる協同効用とメリットを個人志向，互恵懸念，デメリットよりも強く認識しており，協同学習に対する認識は概ね肯定的である，(b) 協同的な活動及び協同学習に関わる，協同効用とメリットの間に強い関係があり，個人志向，互恵懸念，デメリットの間にも関係がある，(c) 協同学習の実施と協同効用及びメリットの認識の間に関係があり，協同学習の未実施と個人志向，互恵懸念，デメリットの認識の間に関係がある，等が示された。これらの知見によって，英語教師は協同的な活動及び協同学習に対して否定的な認識があるのではないかという危惧が，ある程度払拭できた。また，協同学習に関する研鑽・研修等を通じて協同効用とメリットに対する認識を高めれば，英語教師は協同学習を実施するという可能性を示唆している。
（3）Miyasako （2018b)では，米国の TV ニュースを題材とする CBI を AL として実施したした結果，(a) AL による CBI は，大学生，特に中程度の動機を持つ学生，のリスニング理解を向上させる可能性があるが，(b) 大学生の英語学習に対する内的動機づけには影響を与えない可能性がある，(c) 大学生，特に中程度および低い動機を持つ学生，の自律性欲求の満足度を高めるかもしれない，等が示された。これらの知見は，学習者のリスニング能力を伸ばすための多くの理解可能なインプットを学習者に提供するという点で，AL による CBI が有効であることを示している。また，問題解決学習としての AL が，自律性欲求の満足度の向上に係る，協同作業における計画，監視，評価という学習者のメタ認知を発達させる上で，有効であることも示している。
（4）Miyasako（2019)では，英語科教育科目のCBIにおいてALと講義による授業の効果を比較し，(a) ALと講義による英語科教育科目のCBIには，大学生の授業の内容理解に違いはないが，ALの方が授業の脱落者（単位未修得者）が少ない，(b) ALによる英語科教育科目のCBIは，講義による授業よりも，大学生に好意的に認識されている，(c) ALによる英語科教育科目のCBIは，講義による授業よりも，大学

生の動機づけを高める，等が示された。これらの知見は，北米の大学教育のメタ分析程ではないが，ALが講義による授業に内容理解で劣ることなく，学生の評判がよく，動機づけを高める等，ALの有効性を示している。長期的には，学習者のALに対する肯定的な認識が内容理解にも影響を及ぼす可能性もあろう。

（5）Miyasako（2020)では，講義を含むサンドイッチ型とグループ型の2種類の協同授業（AL）を実施し，（a）何れの型も協同授業によるALは，学生の個人志向を低下させる可能性がある，(b）何れの型も協同学習によるALは，学生のリスニングに対する内的な動機付けを促進するのに効果的である可能性がある，(c）グループ型の協同授業によるALは，学生のスピーキングに対する内的動機付けを高めるのに効果的な可能性がある，(d）グループ型の協同授業によるALは,，学生の関連性欲求の満足度を高めるのに効果的である可能性がある，等が示された。これらの知見で鍵となるのは，学習者に色々な機会を提供することであり，次のような可能性がある。(ア）学生が協同作業をする場合，より協力的な方法で行動する，(イ）英語で内容科目を教わる場合，理解しようとする学生は，聞くことへの内的動機を高める，(ウ）英語でやり取りするタスクを課される場合，話すことへの内的動機を高める，(エ）協同作業のグループでは，学生は他の人とのつながりを感じ，相互依存と個人の説明責任を理解する，(オ）学生のビリーフと動機づけの変化が，内容理解と英語能力の向上に繋がる。協同授業によるALとCBIの組み合わせは効果的な選択肢である。

（6）示唆：①比較的大きいクラス規模での AL でも，協同授業の要素を取り入れ，グループ学習においても，個々の学習者の学び（個人としての責任）を損なわない工夫を取り入れるべきである。②英語による AL によって，英語を聞き・話す機会を増やし，英語を聞き・話すことへの内的動機を高め，リスニング・スピーキング能力を高めるべきである。③英語による AL によって，英語学習の動機づけを高め，英語授業が好きな学習者を増やすだけでなく，自律性・関連性欲求の満足度を高め，自律的で協同的な学習者の育成を目指すべきである。④協同学習に関する研鑽・研修等を通じて，英語教師の協同効用とメリットに対する認識を高め，協同学習に基づく AL を広げていくべきである。

（引用文献）

Ericsson, K. A., & Pool, R. (2016). *Peak: Secrets from the new science of expertise.* Boston: An Eamon Dolan Book.

Freeman, S., Eddya, S., McDonougha, M., Smithb, M., Okoroafora, N., Jordta, H., & Wenderotha, M. (2014). Active learning increases student performance in science, engineering, and mathematics. *PNAS, 111*(23), 8410-8415.

Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. (2009). *The new circles of learning: Cooperation in the classroom and school* (sixth ed.). Edina: Interaction Book Company.

宮迫靖静.(2016).「英語の達人はどのように練習したのか」『日本教科教育学会第 42 回全国大会日本教科教育学会全国大会論文集』, 66-67.

Miyasako, N. (2017). What affects university students' perceptions of CBI on ELT and their L2 learning motivation? *Journal for the Science of Schooling, 18*, 75-88.

長濱文与, 安永悟.(2010).「大学生の協同作業に対する認識の変化:対話中心授業と講義中心授業を対象に」.『人間関係研究』, *9*, 35-42.

長濱文与, 安永悟, 関田一彦, & 甲原定房.(2009).「協同作業認識尺度の開発」.『教育心理学研究』,

57(1), 24-37.
西川純（編）. (2016).『すぐ実践できる！アクティブ・ラーニング中学英語』. 学陽書房.
西川純（編）. (2017).『すぐ実践できる！アクティブ・ラーニング高校英語』. 学陽書房.
清水達也, 今村哲史. (2017).「理科における協同的な学習に関する認識の調査方法の検討－大学生の調査結果より－」.『日本科学教育学会研究会研究報告』, *32*(3), 23-28.
Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2009). The L2 motivational self system among Japanese, Chinese and Iranian learners of English. In Z. Dörnyei, & E. Ushioda (Eds.) *Motivation, language identity and the L2 self* (pp.9-42). Bristol: Multilingual Matters.
田中博晃.(2009).「3 つのレベルの内発的動機づけを高める: 動機づけを高める方略の効果検証」.*JALT journal*, *31*(2), 227-250.
田中博晃, 廣森友人.(2007).「英語学習者の内発的動機づけを高める教育実践的介入とその効果の検証」. *JALT journal*, *29*(1), 59-80.
山本崇雄. (2015).『はじめてのアクティブ・ラーニング! 英語授業』. 学陽書房.
山本崇雄. (2016).『なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか』. 日経 BP.
山森直人. (2013).「高等学校英語科授業における教師の英語使用に関する調査」.『鳴門教育大学研究紀要』, *28*, 49-63.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 宮迫靖静	４．巻 69
２．論文標題 アクティブラーニングで学びを深める：プラクティステスティングを中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 英語教員	６．最初と最後の頁 98-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Miyasako, N.	４．巻 70 (1)
２．論文標題 Cooperative content-based Instruction of English language teacher education in Japan	５．発行年 2021年
３．雑誌名 福岡教育大学紀要	６．最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮迫靖静	４．巻 70 (1)
２．論文標題 高等学校英語科教員の協同学習に対する認識	５．発行年 2021年
３．雑誌名 福岡教育大学紀要	６．最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Miyasako, N.	４．巻 68 (1)
２．論文標題 Which CBI on ELT works better, active learning or more demanding lectures?	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Bulletin of University of Teacher Education Fukuoka	６．最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Miyasako, N.	4．巻 64
2．論文標題 Does CBI of English Language Teacher Education in Cooperative Learning Affect University Students’ Perceptions of Cooperative Learning and Motivation Relevant to English Language Teacher Education?	5．発行年 2020年
3．雑誌名 JACET Journal	6．最初と最後の頁 95-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Miyasako, N.	4．巻 20
2．論文標題 Does theme-based CBI in active learning affect university students' intrinsic-extrinsic motivation and listening comprehension?	5．発行年 2018年
3．雑誌名 International Journal of Curriculum Development and Practice	6．最初と最後の頁 49-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Miyasako, N.	4．巻 68 (1)
2．論文標題 Which CBI on ELT works better, active learning or more demanding lectures?	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Bulletin of University of Teacher Education Fukuoka	6．最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 宮迫靖静
2．発表標題 What implications does English as a Lingua Franca provide for English language teaching in Japan?
3．学会等名 日本教科教育学会第46回全国大会（福岡大会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 Miyasako, N.
２．発表標題 What are would-be elementary school teachers' perceptions of EMI on teaching English to young learners?
３．学会等名 The 3rd JAAL in JACET (2020) in Tokyo
４．発表年 2020年

１．発表者名 Miyasako, N.
２．発表標題 Does English-medium Cooperative Learning of English Language Teacher Education Affect Students' Perceptions of Cooperative Learning and Motivation Relevant to English Language Teacher Education?
３．学会等名 The JACET 58th (2019) International Convention（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Miyasako, N.
２．発表標題 A theoretical look at the deep learning element of active learning from a cognitive perspective
３．学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Miyasako, N.
２．発表標題 Is cooperative learning prevalent in TEFL?
３．学会等名 International Conference on Foreign Language Education & Technology VII（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 宮迫靖静
２．発表標題 大学生の協同学習に対する認識と英語科教育科目に係る動機づけ要因との関係
３．学会等名 第49回中国地区英語教育学会・研究発表会
４．発表年 2018年

１．発表者名 宮迫靖静
２．発表標題 アクティブラーニングが大学生の協同学習に対する認識と英語科教育科目に係る動機づけ要因に及ぼす影響
３．学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Miyasako, N.
２．発表標題 A critical look at active learning from a cognitive perspective: Can lectures be active and effective?
３．学会等名 The JACET 57th (2018) International Convention（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Miyasako, N.
２．発表標題 Can cooperative learning contribute to active learning in ELT at secondary education?
３．学会等名 The 58th National Convention LET 2018
４．発表年 2018年

１．発表者名 宮迫靖静
２．発表標題 高等学校英語科教員の協同学習に対する認識はどうか
３．学会等名 日本教科教育学会第44回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 宮迫靖静
２．発表標題 アクティブラーニングは効きますか？
３．学会等名 第24回山口大学英語教育研究会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 尾島司朗・藤原康弘（編）宮迫靖静他14名	４．発行年 2020年
２．出版社 金星堂	５．総ページ数 298
３．書名 第二言語習得理論と英語教育の新展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関